

(☆：チームリーダー ○：発表者)

## 1. 石巻赤十字病院「診療材料等検討委員会」

## 身近な課題からみんなで取り組む医療の質と経営の質の向上

## - 酸素飽和度計プローブは使い捨て？ -

☆鈴木 聡 (副院長)

○松本 裕樹 (事務部管財課 事務職)

キーワード：コスト最適化 医療の質向上 診療材料

【目的】 当院の使い捨てタイプのSpO<sub>2</sub>センサー（以下、センサー）の購入金額は年々逡増していた。導入当初に指導された適切な使用方法が行われていない可能性があったため、コスト最適化と医療の質向上を目的として現状把握と改善活動を開始した。

【方法】 センサーの使用状況と使用方法を把握するためアンケート調査を行った結果、使用方法の説明を受けたことがある者は約3割と少なく、リユースタイプと使い捨てタイプの使い分けについてもバラバラな回答であった。センサーの価格は実際より安価に捉えている者が約6割であった。この結果を受け、センサーの使用基準を定め使用基準には価格を盛り込むと共に、使用方法について統一的な説明会を行った。

【結果】 取り組み前後各5ヶ月の月間購入金額を比較すると、取り組み後群が約63万円（右欄：34×18612文字）有意に低かった(p=0.001)。また、本取り組み後に再度調査を行った所、センサーの使い分け方法について約9割が理解できていた。更に、正しい使用方法が理解できたことで強い圧迫による測定結果への悪影響や皮膚障害を防ぐ等医療の質向上に寄与することができた。

【考察】 本取り組みが奏功した要因は、医師や看護師、臨床工学技士、事務らが問題解決のために専門知識を出し合い、現場に寄り添いながら対策を講じていったことであると考えられる。価格交渉によるコスト削減も重要であるが、同時に適切な使用方法によるコスト最適化を行うことも必要であると思われる。

## 3. 深谷赤十字病院「多職種病棟業務会議」

## 病棟常駐薬剤師主導による多職種病棟業務会議の開催

☆○根岸美由紀 (薬剤部 薬剤師)

キーワード：病棟常駐薬剤師 多職種協働 病棟業務改善

【背景】 当院はH26年3月より病棟常駐薬剤師を配置し、薬剤に関する大部分を薬剤師が担っている。それに伴い、病棟間及び直接患者に投薬を行なう看護師との業務遂行手順の相違などが明らかになった。そこで、多職種で問題点や要望などを定期的に抽出・協議し、相互理解を得ることを目的に多職種病棟業務会議を開催した。

【方法】 開催頻度は1回/月、参加人数の平均は8.2名/回、職種は薬剤師、看護師を主体としつつ病棟業務に携わる多職種へ拡大した。内容は毎回テーマを定め多職種間での討論とし、その後各部署へ持ち帰り、報告検討した。

【結果】 これまで13回開催し、主なテーマとして麻薬・インスリン等ハイリスク薬剤の運用、配薬関連、指示変更の対応等であった。具体例として、手術用麻薬の運用を病棟看護師から薬剤師主導に変更し、従来の薬剤部→病棟→手術室といった複雑な薬剤移動がなくなり、看護師、薬剤師の業務軽減にも繋がった。配薬関連では、病棟間で異なる食前薬の運用を、服薬カレンダーを使用することで統一し薬袋発行も不要となった。

【考察】 病棟では業務量の増大や分業化の中、看護師、薬剤師等が連携を取る場は限られている。多職種病棟業務会議の開催は、日常業務に関する多くの問題点を多職種間で共通認識を持ち、自主的に協働しチーム活動を行なうことで、病棟における医療安全、業務改善に貢献できると考えられる。

## 2. 足利赤十字病院「QPS推進委員会」

## データ活用と検証

☆浦部 忠久 (副院長)

○鈴木 晴奈 (事務部医療情報課 事務職)

キーワード：ガバナンス 患者安全と質の向上 PDCAサイクル

【目的・目標】 病院全体に存在する様々なデータは、部署毎に抱えてしまうことで有効活用できずいたり、抽出方法が異なることでデータの乖離が生じてしまったりしていた。そこで、精度の良い必要なデータを病院全体で活用・管理する方法の構築を目標とした。

【実施対策】 職種から成るQPS推進委員会を院長直轄の組織として設立し、あらゆるデータの収集・検証をすることとした。収集は、各部署からそれぞれ提出してもらうが、抽出元・定義・担当者を明確にすることを徹底し、検証については委員会事務局がサンプルチェックを行うプロセスを導入した。以上のステップを踏んだ後に委員会にて共有を図り、グラフの使い方から数値の細かな掘り下げまでを議論し、病院の改善活動に資するデータを取り揃えるよう努めている。

【効果】 数多く指標を持つことに意味を見出す訳ではなく、指標にストーリーが付いていないと改善活動につながらないことを改めて理解することができた。また、抽出元や定義を明確にすることやサンプルチェックを行うという作業は、データの取り扱いにおける意識を変化させてくれた。

【この活動の利点】 この活動の利点 最大の利点は、多職種による委員会であることからデータ同士に関連性を持たせることができる点である。また、ガバナンスを効かせることで、病院全体におけるPDCAサイクルの底上げを可能としている。

## 4. 長岡赤十字病院「長岡地区消化器内視鏡技師会」

## 内視鏡の質管理向上を目指した地域での取り組み～相互見学会を実施して～

☆岩野 尚子 (内視鏡室 看護師・内視鏡技師)

○村山 寛 (内視鏡室 看護師・内視鏡技師)

キーワード：内視鏡室 相互見学会 地域連携

【目的】 当院では、内視鏡件数の増加と、検査・治療内容の高度化に伴い、必要な設備と機器の不足が深刻だった。そこで、問題点を明らかにするために他施設の見学を行った。その際、設備・機器だけではなく、勤務体制や業務内容、使用している数々の物品など多くの相違があることもわかった。どの施設の内視鏡室も様々な課題を抱えている現状は、県の消化器内視鏡技師会の幹事会等で共通認識されていたが、年3回1時間の会議では、情報交換する内容には限りがあった。解決策を検討するためには、より多くの他施設内視鏡室と情報交換する必要があった。

【実施対策】 病院規模の同様な市内の3施設で相互に見学会を企画した。

【見学会の効果】 見学会では、便利で安価な物品についての情報交換や、限られた設備での動線の工夫、効率的な業務の工夫など、互いに参考になることが多かった。他施設のスタッフ間の交流も深まり、回を重ねる毎に見学しながら互いの施設が抱える課題について話し合う時間も増え、それぞれの施設で解決できた課題もいくつかあった。

【考察】 内視鏡室の抱える課題について深く理解し、検討できるのは、施設が違って同じ内視鏡室で勤務するスタッフだからこそという面もあった。結果、当院だけでなく、地域の内視鏡の質向上につながる事ができたと思える。